

ティミッシュの物語（要約版）

クリストフ プロムバーガー

90年代半ばのブラショフの街、チャウシェスクの時代以来、夜の街はほとんど開発されていなかった。ブラショフは、アーチ型をしたカルパチア山地の北部にあり、ルーマニアの中心部に位置し、28万5千の人口がある。人口密集地である町の4分の1は山地の右側に開け、市街地とカルパチア原生林の境界は、誰にも想像できるように鮮やかなコントラストを描いていた。その結果、夜の境界を越えて見慣れぬ生き物も、闇に守られていた。ティミッシュもそうだ。橋の下で私たちが待っていた5歳のメスのオオカミだ。

私たちは、その年の初め彼女を捕まえた。彼女は小さく、かっこよくはなかったが、オオカミはオオカミだ。そのときはもう3月の終わりで、私たちは本当に幸運だったようだ。彼女の大きなお腹と少し大きくなった乳首は、彼女が妊娠していることを示していた。

次の日、私たちは彼女の首輪からの電波を、ティミス・デ・ジョスの村の上の森、「ティミッシュの下」からキャッチした。私たちは首輪をつけたオオカミに、私たちが最初に位置をつかまえた場所の特徴で名前をつけることにしているので、彼女は「ティミッシュ」と名づけられた。

国道1号は2車線に拡張されており、首都ブカレストとブラショフを結んでいる。そしてティミッシュ溪谷と、プレディール村まで15km並行して走っている。もう一方の側では、60kmほどいくとカルパチア山地が南部ルーマニア平野へなだらかになり、首都ブカレストやドナウデルタを通っている。カルパチアの森はティミッシュ溪谷の両側に広がり、西側はポスタバル山地、東側はピアトラ・マレ山地が東側で、どちらも2000m級の高さがある。

カルパチアのオオカミは道路から離れて身を隠すことを学んでいた。パックのハウリングを聞くことができれば最高だし、冬の獲物の死体が見つかればよいが、実際にはオオカミをちらっとでも見ることもさえ稀なできごとだった。

このシーズンは、ティミッシュが特別なものだということがわかってきた。ルーマニアの最も大きな都市のひとつの近くで、彼女の周辺でもっと多くの時間を使い、行動について学ぶいいチャンスが訪れた。

最初の週は彼女の好みの場所がどこかを知ることができた。彼女のホームレンジは、恐ろしく小さいらしかった。

4月の終わりにかけて、ティミッシュの行動は、ティミッシュ溪谷の下部に集中していた。ブラショフの端からカラスが飛来しているらしいので、3kmもないところであるし、彼女は確かに営巢していると思われるが、私たちには、まだ不確かだった。5月3日の朝、私たちはティミスデジョスの外側にあるスロープから確かなシグナルを受け取った。

小さなスズキの四輪駆動車で私はそこへ向かった。アネッテ・メルテンスというローマからきた大学院生といっしょだった。ブラソフブカレスト鉄道を渡り、それと並行に走っている国道1号から林道を400mほど上がって、大ヴァルナ溪谷と小ヴァルナ溪谷の二つの谷が分かれるところが終点だった。その分岐点に小さなログがあった。2頭の中型犬が私たちに向かって吠えた。私たちは受信機のアンテナを立てていると、3人のきこりがログの入り口から私たちがやっていることを見ようと顔を出した。私たちは彼らに挨拶し、ログの背後の谷から来る強い信号を拾いながら、小さな小川をどんどん進んでいった。アネッテのジャーマンシェパード犬、モリーはそこに置いて、私たちは静かに谷を上って

行った。信号音は、左側の谷から強く聞こえてくるようだったので、反対側にいることに決めた。

ゆっくりと音を立てないように右側のスロープを歩いていく。森は、樹齢100年以上の独特のブナ林と点在するトウヒで構成されていた。古い木が持ち出されたり、嵐で倒れたりしたところは、円錐形の光が当たるため、森の再生のための生態的な条件が作り出され、即座に若木が現れてくる。林冠はまだ完全には空を隠していないが、表面の3分の1くらいはブナやモミの世代交代が始まっている。その斜面の上に出ると、隣り合った谷を分ける尾根に通じる小道に出会った。

クマの新鮮な落し物があるので、森の中はオオカミと私たちだけではないことがわかった。多くの人はこれがいい知らせなのか悪い知らせなのか、よくわからないだろう。私たちはチャウシェスクの狩猟自慢の遺産であるブラウンベアの驚くほどの密度には慣れていて、ルーマニアカルパチア山地には、5000頭以上のクマがうろついている。90年代前半には、この数字はロシア以西のヨーロッパのクマのほとんど半分にあっていた。面積は2%しかないにもかかわらず。数メートルいくと、私たちはまだ新しいアカシカの後ろ足を発見した。オオカミは明らかにこの地をホームにしていた。

山道に沿って400m移動し、発信機から最も強い電波を受信したところのおおよそ真反対のポジションに来たと感じた。私たちは古いブナの隣に座り、観察を始めた。森は生命に満ちていた。ズアオアトリ、ロビン、ヒタキのオスがめいめいのメスを獲得しようと競い合っていた。クロキツツキが機関車のような声でさえずっていた。シロキツツキは私たちの隣の枯れ木にとまり、木を叩いていた。遠くから国道の車の音やブカレスト行きの列車の朝のホイッスルが聞こえた。それ以外は静かで、私たちが、ティミッシュが子どもを産んだに違いないと考えているやぶの周辺には何も動きがなかった。私たちは座って静かな時を過ごしていた。

きこりの小屋のところに置いた車に戻ると、彼らは薪割りをしていて、彼らは、私たちがアンテナと道具をもって森で何をしているのかとたずねた。私たちは二人とも、ティミッシュの子どもを危険にさらさないために、本当のことは言えないと感じていた。というのも農民はまだ肉食獣が好きとはいえず、子どもを産んだあとが彼らにとって一番のチャンスだからだ。私はすぐに、私たちは通信会社で働いて、ブラソフからの電波をチェックする必要があり、山の上にさらに登らされるのだと答えた。イオンとセルギウだと、彼らは自己紹介し、この明白なうそを信じこみ、このエリアにはクマが多いから気をつけなと警告してくれた。私たちは注意しながら、他にオオカミのような危険な動物はいるのかと尋ねたが、彼らは、ここ数年は何も出くわさないと断った。これはいいニュースだ。ティミッシュは気づかれていないし、レーダースクリーンには彼女が現れていた。

きこりの犬たちは私たちの犬と仲良くなって、見張りのため山に登るときはいっしょについてくるようになった。彼らの主人とは対照的に、彼らはそのエリアにオオカミがいることをよく知っているようだった。彼らは巣穴があると思われるあたりからは適度な距離を保っていた。

ティミッシュのお産から10日後、彼女はまた活動的になった。アネッテの犬のモリーが車から飛び出し、丸く走り始めた。私はアネットに指示を出し、レーザーのスイッチを入れて出発した。すぐに大きな信号音が聞こえた。ティミッシュが再びうろつき始めた。信号音は谷の右側から聞こえていた。信号は強いので、ティミッシュは既に近くに来ているらしい。ティミッシュの信号は極めて強かったので、私たちは犬が心配になった。アネッテは静かにモリーを呼んだ。モリーは止まって、私たちを見た。少なくとも私たちはそう考えた。彼女がアネットのひざの裏を鼻でつつくまでは。実際にはモリーは私たちの後ろに隠れ、私たちの前にはティミッシュがいた。私たちは凍りつき、息を止めていた。私はオオカミを確かめ、心臓音が高鳴るのを聞いていた。しかしその動物はただそこにいて、私たちを見てい

た。それから彼女はゆっくりとしたトロットで動き始め、森のはじめの私たちのところを通過し、闇に消えていった。彼女はまったく静かだった。月光がチャンスをくれて私たちが彼女を見ることがなければ、彼女がまさに私たちの隣にいるなんてことは決してわからなかっただろう。

彼女は私たちの近くにきてまったく落ち着いていたのは驚きだった。彼女は明らかに人間をどう扱えばいいのかを知っていた。

ティミッシュは北東に向かって動いていた。それはブラソフの街の方角だ。エンジンをスタートさせ、鉄道をわたった。そして国道1号を北に向かった。1キロほど走った後、私たちは小さなバーがたくさんある駐車場に入った。道路の反対側では、鉄道の軌道を過ぎて、深い森が険しい斜面にかかっていた。オオカミの信号音は弱かったが、彼女はまだ動きまわり、活動していた。信号音は、小さな谷の前後に反射して、強い信号音が定期的に変化した。

次の1週間、ティミッシュは夜行性の活動を繰り返した。正確にいうと、3度同じパターンを繰り返した。デルステとノウア村の上の森で、アップダウンを繰り返し、エコーはその野原から聞こえてくるらしく、正確に彼女の居場所を特定することができなかった。毎回彼女はブラソフの端で3~4時間を過ごし、それから巣に戻った。私たちはまったく困惑していた。彼女は何をしているんだ？

アネッテと私はティミッシュの信号音を受けた。時折国道1号を通過する車を除けば、あたりは静かだった。信号音の強さは徐々に増し、突然受信機からのピープ音が強くなった。彼女は小さな羊飼いの背後の尾根の右側を越えて降りてきたようだ。

小さな羊飼いの犬が吠え始めた。もう一頭も加わってうなった。彼はオリの隣に寝ていたので、明らかに張り切っている。その犬が一瞬飛び出し、吠え始めた。あたりは暗く、詳しいことが見えなかった。信号音はまさに彼女がそこにいることを示している。しかしシープドッグはすぐに静かになった。シェパードもティミッシュが戻ってきたら遠くへは行かないだろう。そして信号音は強く音を打っていた。

私はアネッテにボリュームを下げるように言ったが、彼女はすでにスイッチを切っていた。遠くの街灯がまたたき、私の目の端から犬がトロットで5mほどの道路を超え、橋の下に消えた。

次の瞬間、私は雷に打たれた。

「見た？」アネッテにささやいた。彼女もまたさまよう犬に気づいていた。私たちはティミッシュだと確信した。私たちは車の外に飛び出し、アンテナを向けた。信号音は今は反対の方角からきていた。オオカミは橋の下の水路に入った。ティミッシュは街へ行くのだ！

私たちは以前に水路に沿って歩いたことがあるが、そのときはこれが私たちを導くことになるとは思いもしなかった。鉄路が私たちと水路の間にはあるので、反対側にわたらなければならなかった。車をスタートさせ、橋を戻った。そこを過ぎるトサセレへ入る最初のカーブだ。小さな土の道路を曲がると、川へつながる道を探した。すると、3m幅の川沿いの道を見つけた。木の柵が一方の側で小さな家を囲み、コンクリートの水路の端が反対側にあった。街灯はなく、いくつかのバルブが家の庭を照らすライトがある小屋にぶら下がっていた

ヘッドライトの中に私たちには、水に半分覆われた川床が見えるだけだ。その半分は砂利と砂、ヤナギだった。たくさんのごみがヤナギの中にぶら下がって、プラスチックボトル、バッグ、こわれたタイヤ、くず鉄、オオカミがたまり場にしているようなところとは思えなかった。

ティミッシュの信号は弱くなっていた。よい場所を見つけたのかもしれない。数百m進んで町場を横切り、現場に着いた。ティミッシュは明らかにやるべきことをやっていて、私たちの目の前にいた。1~2分後にヘッドライトの中に羊牧場が現れた。6頭の獰猛な犬が羊の柵の周りに半円に立っていた。

二人の羊飼いがライトの中に、伝統的なシープスキンのコートであるコショックをまとって現れた。コショックを着ていると、雨にぬれても寒くても平気だ。それに、オオカミや熊から羊を守るためにコショックで包むことさえあった。

私はティミッシュが羊を襲おうとしているかどうかと考えたが、シープドッグは闇に向かって吠えたけれども、騒ぎすぎたり、心配しているようには見えなかった。

どんな場合もティミッシュは近づきすぎず、信号音はむしろ弱かった。もう半キロも進むと私たちは大きな山の麓にいた。私たちは混乱したが、少しして自分たちがブラソフのゴミ捨て場の隣にいるのだと理解した。

ようやくわかった。これがティミッシュの夜の旅の目的地なのだ。私たちは東側の 200mほど離れた見通しのよい場所に車を停めた。闇の中で、いまようやく市内の光に照らされてゴミ山の全体が見渡せた。山は 500mほど広がり、高さが 30mほどだった。ティミッシュは活動的に、行ったりきたりを繰り返していた。一瞬動きをとめ、また動き出した。彼女は何をしているのだろうと思ったのは、ゴミの中で食べ物を探しているようには見えなかったからだ。

2 時間後、彼女は満足し、ゴミ山を降り、山へ戻っていった。私たちはデコボコ道で彼女を追い続けることはできないと判断し、ゴミ山の反対側のアスファルト道路に出た。できるだけ早くセレアブクレステイに戻るよう車走らせ、大きな端の前に停めて駆け上がった。受信機のスイッチを入れるとすぐに信号を受けられた。その信号はすばやく近づいてきた。数分後、道路の上を小走りで走る影を見た。ティミッシュは小さな羊飼いの森に再び消えた。

私たちが家にたどり着いて朝食をバルコニーでとったのは、早朝だった。農場労働者の通勤風景をみながら、お決まりのウイスキーを飲みつつ、私たちは分析した。私たちが目撃したことは信じがたいが、いくらかの想像を交えていうと、彼女は「町のオオカミ」だったということだ。

一般の認識は、オオカミが生きていくためには、野生の環境が必要だ。アラスカやシベリアのようなところで彼らは見つかっている。カルパチアはオオカミがたくさん生きられるヨーロッパでは唯一の場所だろう。私たち生態学者は、オオカミは適応性が高いということを知っている。しかし、こんな都会の環境に適応しているとは思いつかなかった。

今なお、ゴミの山で彼女が何をしていたか、疑問に思っている。ゴミを探すより、何かを追いかけているように見えた。次の午後、私たちはゴミ山に戻り、登ってみた。そこにはオーガニックなゴミが山ほどあった。しかしゴム長でその丘の上を歩いたとき、私たちは、そこに群がる犬や猫、ネズミを見つけた。ティミッシュは、簡単に手に入る素晴らしい猟場を見つけたのだ。

夏を通じて、ティミッシュは毎夜ブラソフに通った。私たちはゴミ山だけでなく、カレアブクレステイを降りたところの公園でウサギを狩ることも見つけた。私たちはナイトビジョンゴーグルを備えた。ブラソフは、午後 11 時ごろ、ほとんど誰もいない、何もないゴーストタウンに戻るから、ティミッシュの冒険をもっとたくさん見つけられるようになった。

ティミッシュは、彼女が安全で人間に暴力をふるわれたり、傷つけられたりしないことを完全に理解しているらしい。

6 月になり、子どもたちが数時間の給餌を必要としないようになると、ティミッシュはブラソフの夜の外出を広げた。時には朝までということも頻繁になった。彼女はラッシュアワーの道路を渡り、出勤の労働者が詰め込まれたバスの 10m も離れていないとなりを、気にせず歩いていた。そしてヒグマといっしょになってゴミ箱を漁っていた。ブラソフには野良犬が多くいるため、道端を歩くみずぼらしい

肉食獣に、誰も注意を向けなかった。いま、私たちのナイトビジョンスコープのおかげで、何頭かのオオカミが森から湿地に出てくるのを見られるようになった。大きな雄は明らかに彼女のお相手だ。(アネッテはアルファロメオと呼んだ) 2頭の小さなオオカミはどうやら1歳の子どものらしい。しかし、ひとたび彼らが町に出ると、彼らは別れて行動し、めったにいっしょのところを見るができなかった。

初夏のころは、私たちは点在する巣穴だけを見て周った。そのエリアへの注意をひくのを望まなかったから。

5月の終わりに、きこりの小屋で2頭の子犬が顔を出した。きこりは、他の2頭の犬がもう2週間も見えないんだと言った。彼らに何がおきたかは想像に難くなかった。

2頭の新しい犬も長くは残らなかった。6月半ばには別の子犬が2頭そこにいた。きこりは私たちに、子犬は明らかに誰かに連れて行かれたんだと語った。彼らは逃げるには小さすぎたからだ。7月、これらの犬もまたいなくなった。きこりは夏の間いなかった。オオカミは確かに森から犬を一掃した。

「町のオオカミ」という言葉が世界のオオカミ生態学者の間には急速に広まった。